令和４年度第２回　静岡市アリーナ誘致検討委員会会議録

１　日　　時　　令和４年 12 月 23 日（金）　10 時～12 時

２　場　　所　　B-nest 小会議室１・小会議室２

３　出 席 者　　（委　員）菅文彦委員長、岸昭雄副委員長、岩田孝仁委員、内田久美子委員、桂田隆行委員（オンライン参加）、久保田隆委員、宗野吉利委員、長井延裕委員（オンライン参加）、中村直保委員、安池勘司委員
（事務局）山田局次長、岡村アセットマネジメント推進課長、小澤係長、福島主査、前田主任主事
※欠席：企画局　松浦局長

４　傍 聴 者　　３人

５　議　　題　　（１）開会
（２）委員紹介
（３）報告
①　委員会概要及び進め方
②　第１回検討委員会における議論の整理
③　第１回検討委員会での質問に関する補足説明
（４）議事
アリーナのコンセプト・役割・機能について
（５）事務連絡
（６）閉会

６　会議内容
（１）開会
（２）委員紹介
（３）報告
①　委員会概要及び進め方
（事務局）
（資料２について説明）
（菅委員長）
最終的なゴールは、誘致方針（案）を固め、外部に紹介されるものと理解している。第２回目はポジティブな話が多いと考えており、こういうアリーナが望ましい、こういうアリーナであれば、ぜひ実現させたいと、地元経済界、地域、イベント、プロスポーツほか、様々な立場の方、ステークホルダーが、ぜひ作るべきだという合意形成を、この検討委員会でできればよいと考えている。

第３回目は、本当にできるのかという実現可能性の部分、できたあかつきには、こういった問題も発生し得るのではなかろうかと、ブレーキを踏むところで、リスクに対する対処法はどうあるべきか、資金、収支の問題も当然避けて通れない、事業スキームの問題、ここは桂田委員がご専門だが、事業手法はどういうパターンがあり、その中で１点に絞ることはなかろうかと思うが、こういった資金調達、事業手法が妥当ではなかろうかくらいの合意を、第３回目にやり、最終的に全体を取りまとめるということで考えている。

②　第１回検討委員会における議論の整理

（事務局）

（資料３について説明）

（菅委員長）

前回の皆様からの発言の要旨要点だが、発言の多くは今回の議論にもつながっていくと思い、これを振り返って、本日のメインの議論につなげていただければと思う。

③　第１回検討委員会での質問に関する補足説明

（事務局）

（資料４について説明）

（岸委員）

アマチュアスポーツの需要に関し、市内体育館の稼働率がかなり高いと確認できた。利用料金は、何か利用形態等によって割り引くように、変動するものか。

（アセットマネジメント推進課　小澤係長）

利用料金は各条例等で定めており、細かい確認はできていないが、利用状況によって、減免等の手続きがあることを確認している。

（岸委員）

今回想定しているアリーナのように、純粋に営利目的のような、利益を出すイベントと市民利用は、かなり用途が違う。そこに、例えば料金に格差をつけるような事例を、市内体育館でやっているのか。そもそもアマチュア利用しかないので、そういう問題が発生していないのか。利用料金がフレキシブルで、利用形態によって変えることはできるのか。

（アセットマネジメント推進課　小澤係長）

例えば中央体育館では、プロバスケットボールの試合があり、料金を高く設定するなど、プロとアマの利用によって金額差がつけられている。利用に関し、料金の差をつけることは可能だと考えている。

（菅委員長）

資料４－４の６ページで、類似施設は利用形態によって基本料金が変動しているので、これにならうとすれば、今回のアリーナでも、用途の違いで料金に差をつけることは、決して不自然なことではないと考えられる。

（岩田委員）

地盤については、建設場所だけのスポット的な問題ではなく、広域的に、地域全体が軟弱地盤であるという認識のもと、検討を進めていただきたい。観客の行動によって、振動が周辺にどう影響するかも調査していただきたい。

周辺のグランシップや駐車場は、埋蔵文化財の調査がされている。今回の誘致場所が、すでに事前調査が終わっているのか、将来、調査の可能性があるのか。

プロジェクトシミュレーションの結果が公表できないということだが、次回の検討課題のところで、最終的にこの事業を運営するとき、不足分を誰がどう負担するのかという議論は、当然していかなければならない。どれくらいの規模のものを作って、どれくらいの稼働率であれば、採算ベースでどれくらい不足して、それは誰が負担するのかを議論することが重要だと思うので、何らかの形で、採算収支をどう考えていくのかは、しっかり数字を提示していただきたい。

前回、静岡市民だけのアンケートでは不足する、広域に、東海圏や南関東圏を含めて意見を聞いたほうがいいと提案した。興行事業をされる方々のご意見を今回うかがった中で、資料４－５で気になるのが、静岡は東京と名古屋に挟まれている微妙な位置にあって、名古屋がダメなら静岡という考えもあるが、簡単には稼働率を上げられないというご意見や、愛知からの集客は、愛知県新体育館により少し厳しい状況になっていく考えをふまえると、本当に、広域に全国に集客のターゲットを求めて、静岡できちんと運営できるのかは、もう少し、きちんと丁寧に精査をしておいていただきたい。

（アセットマネジメント推進課　小澤係長）

近くにマンション、病院等があり、振動、騒音についても課題と認識しており、第３回でご意見をいただきたい。

埋蔵文化財は、誘致予定場所が長沼遺跡の包蔵地内にあり、建てる際は調査が必要になるので、今後、事業化して建設する前には調査を行う。

広域の興行利用については、今後どういった方に調査をするなど、前提条件等を整えつつ実施していきたい。

（菅委員長）

事業費の不足額については、ご指摘のとおりで、シミュレーション結果の生の数字を出すことは控えるというところだが、一般的に、このくらいの広さで8,000 席ならこのくらいという数字は、幅はあるが他の事例から大体出せるので、この稼働率があれば、このくらいの収入というところから、その額がこのくらいというのは、次回算出を試みたい。

（宗野委員）

資料を読み込み、愛知県新体育館の場合は、日本ガイシホールがあり、そこをちゃんと計算した上で成り立つような形で考えているのは伝わった。このアリーナも、すでにエコパという存在があり、そこをちゃんと計算していかないと、なかなか難しいとすごく感じた。

（菅委員長）
　エコパの存在を無視できない。コロナ前であれば、設営と片付けも含めて、年間 120 日くらいはコンサート、スポーツなど、年間３分の１くらいは利用されていて、残りは市民利用などで、それなりにライブコンサートをやっていた。そこを奪う形になるのか、それとも潜在的なコンサートはもっとたくさんあるので、エコパはエコパで、東静岡でもプラスアルファのコンサートが呼べるのか、デリケートな部分も含めて、その辺の見込みは、この委員会でもしっかりしたいと思う。
（久保田委員）
　エビデンスがある話ではないが、スポーツ施設のアマチュアスポーツの稼働率が高いという話が出ているが、実態というか、我々ホテル旅館協同組合が、新たに全国大会を開きたいと企画するとか、考えついたときに、十数年やっているが、施設の利用状況でだいたい挫折する。地元が使っているからダメという話で、今見ていただいたように、91～92％とか、地元の人たちがすでに押さえてしまっている。毎年必ずやっているので、プライオリティというか、順位性は考えないで、先着順という形でやっているから、そういうものを静岡に呼んでこようという力を削いでいたのは、長い間相当あった。
　基本的には市の政策で、特にスポーツの需要の関係で、以前はレクリエーションという形で捉えられており、市民のレクリエーションを優先していて、スポーツを興行的に捉えるとか、全国大会をやるので、いろんな人を呼んできて、お客さんを呼ぼうとすることに使う考え方がなかった。
　今こういう状態で、それぞれの市民は満足しているという感覚だが、我々の立場からは、何か新しく建ててくれるとうれしい。このはなアリーナができたときも、非常に期待して、実際に bj リーグが来て、すごくうれしいと思っている。そういう部分があることは認識しておいていただきたい。
（アセットマネジメント推進課　岡村課長）
　ご指摘のとおり、体育館は市民のスポーツ利用、自ら運動する場所という目的が条例上、位置づけられており、そういう大会が優先でなかなかできないことは、その通りだと思う。アリーナは逆に、活性化や、プロスポーツを見ることなどが目的なので、もう少し先の話になるが、優先順位のつけ方は、市がやるにしても民間がやるにしても、運営の考え方を示すことによって、そういう大会が優先されるような形で運営するところは、意見も踏まえ反映していきたいと考えている。
（菅委員長）
　非常に重要なご指摘だったと思う。アマチュアスポーツ利用も２つあり、市民の日常的な利用、体操教室やママさんバレーなどで、体育館がいっぱいになる。これは全国的にも同様だが、一方でアマチュアでも興行型、インカレなど、学生の全国大会は、非常に期待できる部分あると思っている。静岡では十分できていなかったところに、アリーナがあれば、１週間通してというような、興行型のアーチュアスポーツという新しいニーズは、可能性としては十分あると

思う。
(安池委員)
　静岡市がアジアで唯一の SDGs ハブ都市と聞いている。全国大会という話と一緒に、静岡市で国際会議ができるような期待も、このアリーナの会場にはあると思う。そこで、静岡市の前向きな姿勢を世界に発信する、もしくは日本全国、市内外の皆様にも、静岡市の将来のビジョンや姿勢を発信する拠点になるように期待している。
(菅委員長)
　国際会議や MICE 利用、SDGs に絡んだインパクトのある会議の開催も非常に大きいことだと思う。さすがにサミットは無理かもしれないが、伊勢志摩や洞爺湖でサミットをやり、地域のブランドが上がり、シンボル的になるというのも事実かと思う。
(中村委員)
　地域の代表という形の立場だが、あそこに 8,000 人とか 10,000 人が入った時、入場する時とか、退場する時には、一斉に入り、一斉に出る。その時に地域として、どういう動線で集まり、また出るのか。地域の人たちに、どういう形でこれを了解してもらうのか。
　また、隣にマンションがあり、いろんな施設があるが、建物の形によっては風の問題や、いろんな問題がこれから具体的になった時に、そういうこともしっかりチェックしていただいて、住民対策もしてもらいたいと思う。
　エコパとは違い、エコパは駅までの動線がちょっと長いということもあって、こちらの方が地理的にはすごくいいと思っているが、東静岡駅にどのぐらい電車が来て、プラットホームに何人ぐらい入るのか、そういうところもチェックしてもらうとありがたいと思う。
　防災の関係では、たぶん避難場所になると思うが、あの地域には結構大きな施設があって、静岡市の最後の砦として、地域では草薙、野球場並びに陸上競技場、あそこが最大の避難場所になると、地域では想定している。そういうところで、皆様には知恵を出してもらうとありがたいと思う。その隣に、新しくできたこのはなアリーナがあるので、うまく協力しながら連携してもらえたらありがたい。
　建物の高さ制限は、事務局から説明があり問題なさそうだと思ったが、たぶん大きな屋根がかかり、風の流れが変わることがあると思うので、隣にあるマンションに、どういう風の害があるのかも研究してもらうと、ありがたいと思う。
(菅委員長)
　地元の視点からの動線や混雑の懸念は、我々も前回下見をしたが、ご指摘のとおりで、風の問題などは次回、懸念事項、課題を議論させていただくので、ぜひ地元の実情をご指摘いただければと思う。
　防災減災に関しては、アリーナの役割、機能で、今日の議論で出てくる予定なので、そこで確認できればと思う。

事務局にお願いだが、ご指摘があった東海道本線の乗り降り人数のキャパシティの数字が間に合えば、例えば8,000人のコンサートが終わり、一斉に出たときに、何本来て、何人乗れるのか、その辺の数字があると議論がしやすい。

（４）議事

アリーナのコンセプト・役割・機能について

（事務局）

（資料５について説明）

（菅委員長）

役割、機能と別々に縦割りでやるよりは、体系の考え方になるので、こういうコンセプトのもと、役割が求められ、具体的な機能、物理的な条件といったものになると思う。いくつか議論の筋を問いかけながら、できればと思う。

まず、このアリーナ計画のそもそもの発端かもしれないが、興行、プロスポーツ、コンサートの開催、それに伴う様々な経済的な効果、地域経済活性化の軸は、非常に大きな軸なので、まずそこの議論をさせていただきたい。

とはいえ、365日コンサートがあるわけではないので、平日も含めて市民の集い、憩い、賑わい、レクリエーションなど、そういう場にも利用するようなアリーナが望ましいものか。

あとは安心。何かあった時はアリーナがあれば大丈夫、とまで言えるかわからないが、減災、防災の拠点というか、サブ拠点として、市民の安心のようなコンセプトもあるのかなと思う。

それが相まって、究極的にはシンボル、ランドマークのようなものになれば良いのかなと思っている。見る、稼げる、選ばれる、といったところのコンセプトに基づいて、役割や機能について、まず長井委員のご発言をお願いしたい。この静岡の地で、稼働率、特にコンサート需要をどのぐらい取り込めるのか。仮に8,000人だとして、実際の音楽興行、業界の見立てなどから、このコンセプトがどれほどの実効性があるのかといったところは、まずご意見をいただきたい。

（長井委員）

私から伝えたいのは、東静岡という場所の優位性、ポテンシャルは非常にあると思うこと。 5,000人、8,000人、10,000人以上というキャパ設定の問題を示していただいているが、コンサートを作る側からすると、8000と10,000でかなり段差がある。10,000人以上のコンサートだと、いわゆるアリーナツアーのコンサートという形になる。横浜アリーナ、大阪城ホール、日本ガイシ、その辺が１つの基準になって、全国ツアーを回る時にここでできるのかどうかという議論なので、実際にやった時に、8,000人では収益的にキャパシティが足りないとか、広さの面で、全国アリーナツアーがそこでできるかどうかは、検証しなければいけないところかなと思う。

仮に8,000人で、そこそこの広さが確保されたとして、そこでコンサートができるといった時に、興行をやる側からすると、使用料の問題とリンクしてく

る。
　規模の問題にも関連するが、今のコンサートの在り様でいうと、昔からのように、エンドステージ、どちらかにステージがあって、それを残りのスペースでお客さんが見るというスタイルもあるし、センターステージという形を作ってやる公演もあるし、アリーナ面をステージのように活用した上で、演者がいろいろ走り回って、それをスタンドから見るという、スポーツ型観戦に近い形など、ライブエンターテイメントの在り様が実に多様化している。
　そういうものに対応するとなると、必要な設備は何かと言うよりも、むしろスケルトン状態の方がやりやすいと思う。スケルトン状態の時に、ここでしかできないというのは、かえって邪魔になるケースもある。ここでしかできないということは、コンサート面ではあまり売りにならないかもしれない。
　ただ一方では、昨今の状況を踏まえて言うと、スポーツにおいても、エンターテイメントにおいても、5G などの情報通信が進化していく中で、技術を追いかけていくと、すぐに陳腐化しやすいので、受け皿としてのインフラの程度にとどめておくスケルトン状態の方が、今後、対処がしやすい気がする。
　興行をやる側は、オールコストの圧縮が大きなテーマなので、搬入搬出に対する設備、やりやすさ、土間コンクリートになっており、11t トラックが中に入れて、そこで荷下ろしができて、違う方向から一方通行で出ていけるなど、幹線道路と近いところが逆にネックになり、トラックの停め場がないというところは、ぜひ工夫していただいた方が、興行をやる側はオールコストが圧縮できるという意味で、ぜひご検討、考えや指針に入れておいていただければと思う。
（菅委員長）
　仮で出した数字で、今回のアリーナが 8,000 で決まったわけではない。キャパシティがあることから、多様なイベント、興行に対応できるように、あまり癖のない作り、スケルトンにするのがよいのではという、重要なご示唆をいただいたと思う。
（長井委員）
　沖縄アリーナの件で、バスケットで利用されることもあり、バスケットでよく使いがちな、センターの上の方に、4 連でビジョンが吊り下げられているが、あの規模でコンサートをやって、エントステージ、長方形の片方の短辺のほうにステージをつけて、みんなで見る時に、スタンドの上層階の高さがそこになると、それが確実に邪魔になるので、沖縄アリーナもいかに移動させるか苦心されており、それが障害になるケースもあったりする。
　マルチプルに使うという意味で、スケルトン状態が望ましく、どうしてもバスケットで上の方につけなければいけない、これも発想を変えると、スタンド席の高さがそうでもなければ、コート面の対向に平置きにしたほうが、お客様にとってビジョンが見やすいとか、使い勝手の点もあるので、逆にそっちの方がいいということもある。
　AV 機器関係、映像機器関係は時代で進歩しているので、わりと陳腐化も早い

ので、テンポラリーにレンタルした方が、いろんな意味のコストは下がるのではないか。
（菅委員長）
　沖縄アリーナは、琉球ゴールデンキングスありきのアリーナであり、バスケに寄っていると思う。
　エコパアリーナは、コロナ前では３分の１くらいは、市民利用ではない興行、コンサートなどが行われていた。今後、仮に東静岡に大きめのアリーナができた場合、コンサート等のイベント需要のポテンシャルから、エコパアリーナの興行がこちらに移るのか、エコパはエコパでそれなりに需要があり、プラスアルファで別の興行を誘致できるのか、その辺の肌感覚があれば教えていただけるか。
（長井委員）
　エコパアリーナが活用されている中身で言うと、メジャーアーティストが長期間使うケースが多いと思う。使用料が比較的お手頃ということが大きく、わりとスケジュール的に空いているため、全国アリーナツアーをやる時に、そこでリハーサルをやって、リハーサルのまま本番に突入するということが、やりやすい場所の一つとして認識されている気がする。
　競合するかどうかという意味で言うと、メジャーアーティスト、全国でチケットを売り出したら、すぐに売れてしまう強いアーティストの方は、エコパでやろうが、東静岡でやろうが、コストを含めた興行する側のやりやすさの問題とか、お客様の行きやすさの問題とか、動機の問題で選択することになると思う。
　今後のエンターテインメントマーケット、スポーツもそうだが、長期的に見ると、日本国内のそういう消費市場が縮小傾向にある中で、その時に行きやすい場所を取るか、どこでも追いかけていくような強いファンを持ったアーティストをやるか、答えはなかなか出ないが、併存することは十分に可能だと思っている。
　東静岡では、例えば実力的に言うと 7000 人ぐらいしか入らないが、そこをがんばって、行きやすさとか、付加的な魅力、地域でそのイベントを応援するとか、8,000 人ないし 10,000 人の動員を目指そうというアクションは起こり得ると思う。
（菅委員長）
　交通アクセス、使用料の兼ね合いなど、総合的に見て併存は可能というご意見をいただいた。
　桂田委員は、国内に限らず様々なアリーナの事例、情報をお持ちであり、アリーナのポテンシャル、興行収支、稼いで選ばれるアリーナというコンセプトに対するお考えなどをお聞かせいただきたい。
（桂田委員）
　収支採算の予想や、事業スキームのところから、市場環境も含めて申し上げたいと思う。

市場環境として、各地で立地場所は違うが、Ｂリーグの活躍により、全国にこれからアリーナが、全く同じタイミングで、5,000 人から 10,000 人クラスのプロ興行アリーナが、全国でこれから 20 か所ぐらいは、計画があると思っている。

プロモーターに選ばれるアリーナと申し上げたのは、全国にそういうアリーナが増えていく中で、スポーツはチームごとに本拠地アリーナが選定され、そこでプレイする限り、日数と売り上げは確保できると思う。音楽については、ホームアリーナという概念はスポーツほどないと理解していて、私の考えでは、音楽ライブの興行の需要以上に、アリーナが整備されてしまうと思っているので、その観点から、静岡市の商圏人口のポテンシャルがあることは認識しているものの、全国に同時に数十箇所できるアリーナに対して、静岡市のアリーナが選ばれるというところを踏まえた機能や民間運用の自由度は、勘案していただけたらと思う。

プロモーターはどういうアリーナなら使ってくれるかという観点は、今までサウンディング等もされ、事情に詳しい委員もおられると思うので、その委員の方から知見をこの委員会にご提供されたらと思う。規模についても、事務局から説明があったスポーツ 5000 人、音楽 8000 人以上というところに、私も賛成する。

ただ、採算性については、アリーナ運営のプロフェッショナルな事業者が、今後増えてくると思っているので、その方々にある程度委ねることで、収支採算も良くなるとは期待しているが、現状の予想でいくと、静岡で 5000 人、8000 人のアリーナで、少なくとも償却後まで黒字になるとは思えない。採算性は取れるという丸マークは、今日の資料でもついていて、必ず黒字化するという意味での丸ではないと理解したい。

今日も防災とか、社会的な価値のテーマの議論もあり、それに伴うアリーナということで、官民連携によるアリーナモデルというものを考える必要があると思っている。

官民連携の中身は、次年度以降の議論だと思うが、具体的に言うと、官民で人、物、金をどう負担するかという役割分担の話になるのではないか。民間だけで全部やってくださいというのは、今の時点ではなかなか難しいアリーナ案件だと思っている。

長い議論を経ていて、東静岡という場所がこれから再開発するエリアだと理解しているので、そういうことはないかと思うが、特に立地予定場所の近隣住民に事前から丁寧に説明をして、音が相当に漏れるかもしれないような建物が、自分の近所に建つことについて、ある程度、住民の方から同意や了解、サインをいただいているのか。勉強会やワークショップをしたと書いてあるが、一部の市民に対してやったことがあるが、実はあまり地域住民に向かって、正面から説明をしたことがないような状況なのかというところは、今日、事務局に確認してみたいと思っていた。それによって、せっかく議論したことが後からひっくり返ってもと思い、質問した。

（菅委員長）

ご知見の通り、全国にアリーナ計画がほぼほぼ出ているところは、無視できない重要なファクターだと存じている。

そういう中で、ちょっと固めにいろんな見通しを立てつつ、その上でアリーナの設計スペックの工夫をこなして、結果的に選ばれ、稼げるといった方向性をしっかりと汲み取っていかなければいけないと理解した。

長井委員からは、いわゆるスケルトンという、多目的に利用するアリーナの設計、構造が望ましいという示唆をいただいた。桂田委員から、アリーナの形状とか、もし何かイメージがあればお願いできるか。

（桂田委員）

馬蹄形、U字形のアリーナは、音楽イベントの時に設営コストが、通常の体育館モデルより安くなるというところに、非常に期待をしていて、スケルトンにする場合は、設営コストをある程度、主催者側が持ち出すことになると思い、選ばれるアリーナというときに、設営コストが高くていいのかという論点はあると思う。

設営コストがリーズナブルにできるアリーナであれば、その点からもプロモーターからは選ばれるアリーナになると思うし、設営コストがそれなりに発生するアリーナであれば、貸館使用料との絡みも含め、設営が楽な方とか、リーズナブルなアリーナに需要を取られてしまうのではと懸念した。

（長井委員）

多目的というか、ライブエンターテイメント、音楽にしても、音楽以外のショーにしても、表現形態が多様になっていて、馬蹄形のスタイルはありだと思う。もしキャパを 5,000 人くらいにするのなら、馬蹄形にして、Uの上のほうにステージがあるという想定だとすると、それはそれでひょっとしたら、そういうところが全国各地にできれば、そういう会場を選択して、全国ツアーをやるということが成立するような気がする。

初めの１歩の方針を、どちらにするかということだが、8,000 人以上にするなら、センターステージでやる公演もできたとして、馬蹄形の作り方にもよるが、基本計画の前の段階かどこかで、いくつかレイアウトをした形を検討する段階になるという気がする。

（桂田委員）

そこの議論は必要だと思う。どこの設計段階の議論でやるかは、実現可能性調査をする時に、同時並行で基本計画調査も走らせる自治体もあり、その両方走らせると、コンセプトワークと、スペックとしてどうかというところの議論が同時にできる気がして、次年度以降の話だと思うが、議論効率が高まる気がする。

馬蹄型と言えば、日本で計画されているのは横浜市の新横浜文化体育館のメインアリーナと、愛知県新体育館のメインアリーナの２つか。

（長井委員）

昔、ディズニーランドの横にあった NK ホールは、まさに馬蹄形というか、

あそこは劇場で、真ん中でプロレスをやっていた。それぐらいではないか。また、パリのスタジアムが馬蹄形ではないか。スタンド、それなりの設備をそなえると、建設コストが高くなるという印象である。

その辺のシミュレーションを、どういう形でやれるか。別途、分科会が設定されて、絵を見ながら委員の皆さんで、いろいろイメージ合わせをしていくというのも、どこかの段階で、この検討会の中でやっておいてもいいと思う。

（桂田委員）

スペックのところで、馬蹄形とともに、天井の高さをどれくらいにするかは必要な気がする。

（長井委員）

スポーツを入れるために、バレーボールが 30 数mとか、あの辺が制限規定になるのでは。

（桂田委員）

今の日本のトップアリーナなら、高さを 30～35mは必要ではないか。

（長井委員）

その高さと、高さに応じてスタンドの最上階をどれくらいにするかは、一つの在り様で、委員の皆様でイメージ合わせをするというプロセスが、どこかであってもよいと思う。

（菅委員長）

ぜひ、事務局からうかがいたいが、全国の様々なアリーナ計画があるが、そこのキャパシティや形状、馬蹄形あるいはスケルトンなど、ある情報をぜひ、両委員から事務局に情報提供いただければありがたい。

２人の委員から、稼げる、選ばれるアリーナに関しては、基本的にはいけるだろう、ただし、いろんな条件があり楽観はできないという印象である。作ったら、ぼんぼんコンサートが来てくれる、そこまで簡単な話ではなく、相当固めの試算、見通しを持った上での、稼げる、選ばれるアリーナということかと思っている。

かなり稼働率が高まれば、結果的に経済への波及、あるいはまちづくりにつながっていくと思っている。仮にこういうアリーナができて、コンサートあるいはプロスポーツで様々なお客さんが来た場合、どういうところに地元経済界は期待しているか。

（内田委員）

本アリーナができることによって、交流人口の拡大とか、地域経済に良い影響がもたらされることは、行政や経済界だけではなく、市民にも明確に分かっていただくことが大切だと思うし、他の施設や商業地の連動性についても、そのことはつながってくると思う。

そのためには、県外の既存のアリーナが抱えている問題点とか、利用者が不便に思われていること、求められていることなどを、主催者として聞き取ることで反映し、それが未来志向のアリーナに繋がっていくことが大切かと思う。

稼げるアリーナとして、最高峰のスポーツや、有名アーティストによる大規

模コンサートが、１番稼げるメインになってくると思うが、以前、フェンシングのメダリストの太田選手の講演を聞いた時、スポーツを見せるだけではなく、エンターテインメントとして、彼はメダリストなので、ファンも大勢いるが、会場をキラキラに飾りつけて、ファンの方と触れ合える設備を作るために、本当に苦労したという話、そういう会場もなく、それをやらせてくれるところもなくという話だったので、コンサートやスポーツ、ただ、スポーツで戦うだけではなくて、全国にいる様々な趣味、趣向を持った方々に、それを披露するという柔軟性を持ったアリーナであることが、これから求められていくと考える。

(菅委員長)

既存の興行をただ呼ぶだけでも、新しい、何かキラキラしているエンターテイメント型のスポーツ興行でも、コンサートのコンテンツでも、興行内容を制限しないというご指摘だと思う。

久保田委員は、10,000 人規模の代表者の会議や、集う場所ができた場合、どのあたりに期待されるか。

(久保田委員)

非常に期待している。何年前か覚えていないが、THE ALFEE の日本平コンサートがあって、その時の静岡県全体の宿泊産業が、約３日前、２日前から、あと２日ぐらい、富士から掛川、浜松くらいまでいっぱいになった。すごいことが起こったと言って、旅館組合として非常に興奮した思いがあったが、残念ながら近隣への騒音で、１年で終わりになった。本当に衝撃だったが、こういうことができるところがあれば、もしかすると、非常に大きなポテンシャルを静岡は持っているんだなと、その時に感じた。

それと同時に、周辺住民への騒音に対し、気配りがその時になかったというより、たぶん何も考えないでやったと思うが、今回は想定されているので、ぜひそこのところを、今のうちに考えながら、ちゃんとした説明をしたり、逆に言うと、周辺の方々を取り込んでいくと言ったら言い方が悪いが、一緒に考えたり、一緒に彼らと Win Win になるような形で、計画を進めていただく、そういう部分が必要ではないか。

内田委員がおっしゃった、柔らかく、あるいは長井委員がおっしゃっていたが、施設を作ったとき、こういう風にするというコンセプトが強すぎると、そこから外れたものに対して、うちではできないという形で、一旦、物ができて運用が始まると、どうしてもそういう部分が公設の場合には出てくる。

その時に、キラキラの飾りつけをしてはいけないとか、ここはこうなっているからこうだというものが、行政的なものの中で、ある程度、どうしても制限がかかる部分も出てくる。ここの部分が、結構つまらないことで、お客さんがいなくなり、選んでもらえなくなる。そういうところを少し考えておいた方がいいのではないか。

長井委員がおっしゃったように、スケルトンというのはつまり、新しい物の陳腐化がすごく早く、あっという間に１年ぐらいでも、あれを使っていたけどもうダメだという話を、いろいろな状況で聞いている。そこは注意したほうが

いいと思う。
　静岡市の方には大変失礼だが、静岡市の素晴らしい音楽ホールとして、AOIがある。それが作られた時点では、若干だが、少しバロックに近い音楽を、と考えられた。音響性能が良すぎるというか、響きが強すぎるから、そこの場所でジャズをやることになって、ドラムを叩いてしまうと、音がワーワーして全然向かない。そうすると、バロックしかできないのか、逆に言うと、作られた時点では、バロック専用と考えられたが、それがどのくらいの需要があるのかということで考える、こういう柔らかな視点を持っていただければと思っている。
（菅委員長）
　地元経済と、住民への説明、理解は、第３回のアリーナができたあかつきの課題の中で、ぜひ中村委員から、地元の実情をふまえたご意見をいただければと思っている。
　単純に従来型のアリーナを作るだけでは、あまり期待される効果は出ないだろうと、この多目的利用で、新しいエンタメの空間は、そこに文化創造という機運醸成もあるが、次世代型のエンターテイメントの空間になるという期待はあるかと思う。
　地域経済で、ぜひ岸委員にお伺いしたいが、静岡市でそれなりの経済規模、経済圏がある中で、それなりの経済波及効果はもちろん出るとは思うが、それは本当に意味のある数値、金額、規模なのか、あるいは静岡市の全体の経済規模からすると、誤差の範囲なのか、いかがか。
（岸委員）
　経済波及効果の計算を専門でやっていて、その議論でいつも感じることだが、経済波及効果は当然、利用者に比例して増えるが、例えばここでイベントが打たれて、静岡市民に利用していただくと、本当は街に行って映画を見るはずだったお金を、こちらのコンサートに回して楽しむと、実は経済波及効果は市内で移転しているだけで、結局プラスアルファはあまりない。こういう経済波及効果は、単純に利用額かける利用人数で計算して、それが生まれてくるようなイメージを持つが、実は多くの部分は消費の移転が起こっているだけで、実はそれほどのインパクトはないというのが、よく言われる。
　若者のエンターテイメントが重要だと前回申し上げたが、今回の場合、例えば静岡にはないから東京に出ていって、そこで楽しむ、付随して東京に泊まって、東京で消費活動をしてから静岡に帰ってくるようなことを、若者は毎週末する。そういう需要に対して、静岡でエンタメを提供することによって、外部に出ていた消費を、静岡市内、静岡県内に取り戻すということであれば、域外からの移転なので、静岡市としては、非常に大きなインパクトが生まれてくる。ぜひ、東京とか名古屋とか、そういったところに出ている需要に目を向けて、それを静岡に少しでも取り戻すような切り口から、興行の内容とか、そういったものを考えていただくと、非常にいいと思う。
　いろいろご意見があったが、新たなエンタメに対応するというのは非常に重

要で、大学に勤めているので、学生に聞いて、例えば、週末に YouTuber のイベントがあるから行ってくるとか、私が大学生のときは、YouTuber がそもそもいなかったが、相当ライブが人気の人はキャパが取れる。コンサートもいろいろな形態になっている中で、新たなエンターテインメントを先取りして、静岡で、若者に響くようなエンターテイメントを意識して開催すれば、相当効果がある。

若者というのは結局、静岡市で１番よく言われることだが、10 代後半から 20 代の人口流出がすごく激しい。そこに訴求することで、中長期的に静岡の消費活動を、外部に出ていっているものを戻すことができる。その１つとして、エンタメを提供することによって、静岡で暮らす、静岡で消費もエンターテイメントもある程度完結できる環境を、もっとプラスアルファとして生み出すという位置づけで、このアリーナがあれば、経済波及効果も、単に静岡の他のエンタメから移ったわけではなく、外部からしっかり取り込むという意味で、大きくなっていくと感じる。

（菅委員長）

域外に持ち出さずに、地元で消費しつつ、外貨も獲得すると理解した。域外からバンバン来ていただけるようなコンテンツというのは、ある意味重要か。

（岸委員）

域外から連れてくるのもあるが、域外に出て行っている静岡の若者に、中で消費してもらう。

（久保田委員）

岸委員のおっしゃった通り、旅館組合をやっていて、どこから誰が来て、どういう消費をしているかが、徐々にわかってくるが、静岡市の圏外、静岡市外から来ている人が相当いる。静岡市の議論として考えていく場合だと、こういったものがあれば、明らかに増える。間違いなく静岡市外、西は浜松くらい、今までエコパアリーナで行われていたものが、こちらへだいぶ動くということになり、当然、その人たちが泊まる。東京の人が泊まっても、掛川の人が泊まっても同じなので、相当な経済効果があり、静岡市の旅館組合として、本当にこういうことやってもらいたい。

そういう部分を、どれだけこの中に取り込めるかが、ものすごく重要だと思うし、実際にそういったものが行われ、それがもうちょっと大きくなれば、県外からも来られる。

ただ、東京、横浜、名古屋の間に挟まれているから、そこで沈むのか、もつかどうか。

実際にエコパアリーナに行き、終わったところで、ただ帰る時の経済波及効果と、静岡、東静岡の場所だったら、何か別にやっていこう、食べていこう、泊まっていこう、遊んでいこう、があるかどうかは重要なファクターだと思う。

（菅委員長）

１つの柱として、見る、稼げる 選ばれるアリーナという３つの部分を軸にした。基本的にポテンシャルはあるという見通しだが、相当固めに、楽観せずに

考えていく必要がある。プラス、従来にはない新しいエンターテイメント、コンテンツにも対応できるような箱である必要がある。そのあかつきには、一定程度の地域経済への効果、地元から外に流出していた分が、地元に留まって消費が行われる。プラス、域外から来訪者による宿泊その他という循環ができるといったところで、議論の整理は一応できると思っている。

もう１つの軸は、やはり地元目線、地元にとっての憩いの場、安心の場としてのアリーナのコンセプトも、同様に重要と思っている。

中村委員に発言をお願いしたい。騒音、混雑、渋滞などの懸念事項は次回もちろん議論させていただくが、一方でプラスの材料、アリーナができた場合の、周辺の住民の皆さんにとって何かプラスの材料は、いかがお考えか。

（中村委員）

静岡にこれだけ大勢の人たちを誘致する場所が、今までなかったということは、ご存知の通りで、そこに１つの拠点としてあることによって、地域の人たちも意外と、理解してもらえるところもあるかと思う。

岸委員の若者が多いという話だが、静岡に５つの大学が駿河区にあり、アリーナができることになると、ここは文教区という言葉がいいかわからないが、アリーナ自体が教育の場にもなるかもしれない。いろんなスポーツを通じての教育、音楽を通じての教育、いろんな場所となることは、夢があると思っている。これに対して、久保田委員からお話があったが、ここで止まると、もったいないと思っている。

クランシップができた時、世界会議をやろうという形でできたはず。世界会議をやろうと思ったが、実際に静岡に何の観光があるのか、どのくらい泊まれるのかと言ったら、みんな東京に行ってしまった。そこを留める工夫が、静岡ではここ 10 年、20 年の間、あまりしていなかったということがあって、とことん観光を、しっかりした位置づけにしてできるといい。

グランシップの時の私案で、巴川を運河にして、駿河湾へ観光で回したらどうかという話があったが、日本平に行って、実際あそこで世界の軍縮会議を開いたようなホテルだから、結構、静岡に有名なところがある。そこがなんとかうまく、地域としても、住民としても協力しながら、いかに人口を留めておくか。また、静岡に帰りたいという方向づけが、このアリーナを作ることによって持たれると、すごくいいと思っている。今のような話を、ぜひ実現してもらえるとありがたい。

（菅委員長）

教育の場という、新しい視点をいただいたと思う。大学もあり、こういう社会的な意義、住民の目線というところは、こだわっていきたい。おそらく完全な民設民営は難しいだろうと、一定程度の公金、財政支出はあり得るといったときに、儲かるというだけではなく、市民にとって、暮らしの中でどんないいことがあるのか、というコンセプトの必要性は感じている。

災害の部分で望ましいと思われるのは、アリーナがあることで、ある程度、何かあった時は頼れる場所になるのか、なるためにはどういう考え方をすれば

いいのか、減災、防災という役割で、現時点での岩田委員のご見解はいかがか。
（岩田委員）
　どれくらいの規模の、どれぐらいのスペースが使えるかという大前提が、あまり見えていないが、災害対応を考えると、いろんな機能に余力があった方がいいというのが原則。誰でも考えるのが、物資の集積拠点であるとか、自衛隊とか警察、消防とかの活動拠点に適用できるのではないか、帰宅困難者の一時的な収容施設に使えるのではないか。
　何千人も、コンサートや観戦でお見えになっている方がいると、一時的にかくまわなければならない。そのための食料や水、ライフラインとしての非常電源、そういうものを施設そのものが確保するというのは、いろいろな設計をする時に求められる機能。
　大前提として、ここら辺は軟弱地盤であることを考えると、防災がメインの機能にはなかなかなりにくい。例えば物資の集積拠点も、静岡市の計画を見ると、広域の拠点を葵区、駿河区、清水区と、それぞれ既にお持ちになっている。住民生活に比較的密着した場所に、現実に施設を持っておられるから、それはそれでちゃんと機能させた上で、それを後方支援するような場所として考えていくのが良い。
　自衛隊、消防、警察も、基本的に全県下、広域の拠点は既に決まっているから、例えば静岡市へ派遣される部隊の宿泊施設とか、一時的に資機材を置くスペース、そういう形で提供することは考えられる。
　軟弱地盤は結構厄介で、2018 年の北海道胆振東部地震のとき、札幌市内の４車線の大通りが、メートルオーダーで段差ができた。北海道特有の泥炭地帯だが、長期間にわたって使えない状況が、いろんなところで起きる。そういった環境の中にこの施設があるとすると、ハードウェアとしての施設、建物がどれくらいあるか、その周辺の敷地、オープンスペースがどれくらいあるかによって、実際に活動拠点として、どれぐらい使えるかは様々なケースを勘案しておく必要がある。メインとして、ここを災害拠点というふうには考えない方が良い。
（菅委員長）
　専門的な知見をいただき、軟弱地盤などの懸念もあるが、一定程度は地域防災拠点、何かあったときの活動拠点には一応なり得る、そういう役割も求められる、求めるべきと、そういうお考えをいただいたと思っている。防災に関しては次回以降も、より細かくお話できればと思う。
　宗野委員は、全国、海外も含めて様々なアリーナ、スタジアムをご覧になっているが、市民のレクリエーション、非日常利用やコンサートだけではなく、何もやっていない平常時でも、お茶をしたり、ジョギングをしたり、アリーナの周辺も含めてパーティーのようになっている、そういうのは最近増えているかと思う。参考になる事例のご紹介や、市民の憩いの場はどんなイメージだったら良いのかなど、その辺りのご意見をいただければと思う。
（宗野委員）

取材やプライベートで試合の日に行き、試合以外に行く時もあるが、家族連れが芝生とかで、みんなで子供と一緒に遊んでいるイメージだと、すごくいいと思う。逆に、若い世代というところで言うと、あそこに今、スケボーの施設があるので、スケボーとか。

特に今、学校でダンスをやっているので、若い子たちはダンスが大体みんなできる。よく夜中にガラスが大きなところで練習しているが、騒音や近所の苦情で、練習するところがない子たちがいるので、アリーナの壁面が、そういうことができるようになっていると、静岡は公共のところで、夕方とか夜に集まって、自由にダンスができるくらいのことが、子供たちが言えるようなものがあったりすると、プロスポーツとかライブとか、エンターテインメントではない別の魅力を、アリーナに持たせることができるのではと期待している。

（菅委員長）

地域の暮らしと繋がっているような空間があればというところは、感じるところもある。もう１方の柱は、地元の憩い、レクリエーションと安心、そういう場でもあるといったところは２本柱で、先ほどの経済面と暮らし、社会。 そういう形で１つ、まとめることはできないかと、今日の議論の印象を持っている。

安池委員から、全般的にアリーナのコンセプト、あるいは役割あたりで、ぜひご意見をいただきたい。

（安池委員）

初めに、アリーナのコンセプトのところで３つ出てきたが、今回、この検討委員会で課せられているのは、静岡市が東静岡エリアにアリーナを誘致することが、大前提のテーマになっているので、次に、どうすればそれができるか、課題の部分がまだある。

そこで、しっかりとしたコンセプトを立ち上げて、概念として全体を貫く。基本的な観点や姿勢、考え方がコンセプトになると思うが、静岡市が市民の皆様に、しっかりと理解してもらう、期待をしてもらう、アリーナができることで、この街に誇りを持ってもらうシビックプライド、こういうところに繋がってくるということが、市民の皆様に分かってもらうことで、アリーナが誘致できるので、ここが非常に大事だと思って聞いていた。

もし盛り込んでいただけるなら、まずは市民の皆様に理解してもらえるアリーナというところを、重要な点として掲げることで、皆様に理解していただけるような気持ちに近づけると思う。

（菅委員長）

ご指摘の通りで、コンセプト、役割にこれだけ時間を取ったのは、みんながアリーナを必要だと思っているわけではなく、様々な立場の方がいる。アリーナは本当はいらないのでは、というご意見も至極、真っ当なご指摘だが、こういうコンセプトで、こういう機能が発揮されて、こういう効果が出るというのは、ここでしっかりとまとめておきたかった。議論の詳細は、事務局で議事録としてまとめていただければと思う。

（長井委員）

ステップとして、すごく有意義だと思う、最終的に、民間の事業者を誘致するスタンスであれば、民間の方はそれなりに、経済原理に基づいた形の収益性を当然考える。一方で、静岡市としては、社会、地域経済の波及も含めて、地域に利益化することを考えると、すぐには数値化できない。

先々の議論の向かう方だが、建設については、静岡市が財政的な負担等を考えていることを前提に置くと、いろんな議論のブレがないと思う。なかなか明言できないと思うが、いかがか。

（アセットマネジメント推進課　岡村課長）

令和３年度のシミュレーションで、ランニングは黒字で回るが、イニシャルも含めた全ては回らないといった試算が出た上で、この事業を進めていく。桂田委員からは、もしかしたらランニングも黒字が厳しいのではないかというご意見もあったが、当初目指していた民設民営、全て民間というのが厳しいことは、数字でもおさえている。それをふまえた上で、先ほど議論していただいたように、官民連携で、それぞれ役割分担のもとで進めていく。

通常の施設に比べ、久保田委員のご指摘のように、運営は限りなく、自由に民間に任せるという発想のもとで、官の部分がどういったところを担っていくのか、防災な部分とか、騒音、振動とか、そういった課題に対しては、公共がしっかり負担していくというところで、この議論を整理しながら、公共としても、必要な負担を担っていくということが前提なので、行政としても当然、必要な経費を負担することは、今後、議論を詰めながら決めていきたいと考えている。

（長井委員）

仮に、私がアリーナ建設及び、その事業運営に関心を持っている人間だと想定すると、実際、何を満たせばここでやれるのか、金額はともかく、静岡市、あるいは静岡市民の皆様としての基本要件を、並行して整理しておくという気がするが、いかがか。

（アセットマネジメント推進課　岡村課長）

長い間検討し、初めて対外的な委員会を作っていただき、専門的な意見、市民の意見を含めて、誘致方針で大きなビジョンを作っている。この後も細かい議論もあるが、こういった議論を並行させながら、長井委員からご指摘いただいたことも踏まえ、市として必要な意思決定を行い、進めていくべきだと考えている。

（菅委員長）

官民連携を前提とした事業スキームのあり方が、次回の大きなアジェンダなので、様々なご示唆をお願いする。

（アセットマネジメント推進課　小澤係長）

本日議論いただいた、コンセプト、役割、機能については、今日の議論の内容を整理させていただき、第３回に振り返りを行いたい。事務局として、考え方の整理が必要な点につきましては、今後、各委員との意見交換等をふまえて

整理し、次回説明させていただきたい。

（５）事務連絡

・第３回目の委員会は、２月 14 日に開催予定

（６）閉会